

『古事記』『日本書紀』に於ける

天皇・皇太子の武力行使に関する考察

太刀川 直樹

はじめに…本稿の狙い

日本のヤマト王権が主導し正式に編纂された最初期の書物として知られる『古事記』『日本書紀』の文中に於いては、天皇、皇族及び天つ神らが武力行使を行い、異民族⁽¹⁾やまつろわぬ神らの征討を行う場面がたびたび見られる。日本の「英雄伝説」に関してはこれまで西欧に於ける英雄像との類似性も含め多くの論考が為されてきたが、景行天皇の皇子であるヤマトタケルに代表されるように、これらの行為は「英雄」としての重要な要素の一つであると考えられてきた⁽²⁾。

本稿に於いては、両書中の征討記事に於いて天皇が自ら軍を率い戦闘を行う場合と、配下に指令を出すにとどまり自らは動かない場合があることに着目し、整理を行う事により、両者の性質、そして位置づけについて考察を加えたい。

ここで特に着目したいのが、景行天皇と仲哀天皇に関する記述であ

る。詳しくは後述するが、両者ともに軍事行動に際して取る立ち位置に注目すべき点がある。景行天皇は『古事記』『日本書紀』両書に於ける記述が大きく異なることが知られ、仲哀天皇は『日本書紀』の当該記事一書に於いて、天皇の中で唯一異民族の手によって敗死したことが語られる異質性を帯びている。

本稿に於いては、特にこの二天皇に関する記述について着目し、他天皇記事の記述も補助的に用いつつ、『古事記』『日本書紀』に於ける天皇・皇太子の武力行使の意味について考察を試みる事とする。

なお、『日本書紀』の異伝である「一書」に対する本伝に当たる文章の呼称は「本文」「正伝」「本書」等様々に提案がなされているが、本稿に於いては「主文」と呼称する事とした⁽³⁾。

一、景行天皇記事について

考察を進めるにあたりまず考えてみたいのが、景行天皇の征西に関する記事である。この内容は『日本書紀』に於いてのみ語られている内容であり、従来の研究に於いては『古事記』『日本書紀』両書の景行天皇記事に於ける大きな差異の一つとして数えられる物である。

両書の景行天皇記事を並べて整理すると、一見先述した「天皇が自ら征討を行う」記事に該当する『日本書紀』と、「配下（＝ヤマトタケル）に任せて自らは動かさない」『古事記』と言う形の差異になっているように見える。即ち、『日本書紀』に於ける景行天皇が自ら兵を率いて異民族征伐を指揮したのに対し、『古事記』の景行天皇は都から動かず、ヤマトタケルに指示を出すのみであるように見えるのである。この事に関して、大久間喜一郎氏は以下のように述べている。⁴⁾

崇神・垂仁が倭にあつて、外征を行つたらしい伝承が見られないのに対して、景行天皇は書紀に拠れば、治世の十二年から十九年までは熊襲平定の為に筑紫へ幸した。また、二十五年には武内宿禰をして北陸及び東国を視察させたとある。この天皇は神武は別として、外征に終始した天皇である。天皇というよりも武将の悌を持つている。

『日本書紀』の記述に於ける景行天皇が、筑紫平定の為に自ら筑紫

へ赴いたことを指摘し、天皇と言うよりも武将、武人としての要素を有している事を指摘する内容である。従来の研究に於いては、この意見が妥当なものとして享受され、記紀の記述に於ける大きな差異として扱われてきた感がある。

然し、ここで確認しておきたいのが『日本書紀』に於ける景行天皇征西記事の発案者と実行者の関係である（表一参照）。

景行天皇の軍事行動に関して改めて整理すると、景行天皇は自ら軍

表一 『日本書紀』景行天皇の軍事行動

事績	発案者	実行者
姿磨南方の偵察	景行	武諸木 菟名手 夏花
鼻垂、耳垂、麻剥、土折猪折の征伐	神夏磯媛	武諸木 菟名手 夏花
青、白、打猿、八田、国麻呂の征伐	速津媛景行	猛卒 官軍
厚鹿文、辻鹿文の征伐	景行 臣 市乾鹿文	市乾鹿文 兵
巡狩中の偵察	景行	兄夷守 弟夷守
弟熊の誅殺	景行	兵
津頼の征伐	景行	不明
北陸・東国視察	景行	武内宿禰

勢を率いて征西に出征してはいるものの、現場に於ける実際の武力行使に関しては、配下に指令を發し、派遣して行う立場で一貫している事が分かる。即ち、この場面に於いて、景行天皇が異民族を征伐する為に自ら出撃し、前線で戦闘の指揮を執っている場面は見当たらないと言えるのである。

表一に示した通り、土蜘蛛「津類」の征伐に関する記述に於いては、天皇以外の征伐実行者が明記されていないが、この記述は非常に短く簡潔なものとなっている。この記述は、「天皇は自らの手で直接武力を行使しない」という法則に反して「天皇が唯一自ら手を下した土蜘蛛が津類である」という、津類を『日本書紀』に於ける例外的な位置づけに置くような意味合いを持つ記事ではなく、やはり詳細な伝承が欠落した、又は省略された記述であると考えの方が自然であろう。即ち、『日本書紀』景行天皇記事十八年六月記事に於ける「時殺其處之土蜘蛛津類焉」という記述は、諸注も特別視していない通り、やはり「景行天皇が自ら土蜘蛛津類を殺した」として読むのではなく、「景行天皇一行（＝景行天皇の率いる軍衆）が土蜘蛛津類を殺した」と解釈するのが妥当なのであると言える。

即ち、『日本書紀』景行天皇征西記事全体に於いて、景行天皇は都を離れて自ら征西を指揮する姿が描かれてこそいるが、全体的に異民族に直接手を下して征討を行っているわけではないとまとめる事ができるのである。『日本書紀』に於ける景行天皇が「軍事作戦に際して都を離れ、現地の拠点に於いて配下に指示を出す」という性質を有し

ているのは事実であるが、やはり自ら異民族討伐の実行者としては振る舞っていない。その征西、異民族征伐に於いては、大久間氏の指摘する「武將」としてではなく、やはり「司令者」たる天皇としての性質を有しているものとして描かれているのだと言える。

つまり、先述の通り、この征西記事に於いてもやはり例外なく、天皇の仕事としての「司令者」と現場で指揮を行う「武將」は明確に分けられているのであって、景行天皇は一貫して前者として描かれておりと考えることができるのである。

『日本書紀』に於ける景行天皇の征西の事績は、天皇として敵対する異民族の討伐の「指揮」を行ったというものであって、積極的に「英雄」としての行動をとっているわけではないと言えよう。

そう考えるのであれば、『日本書紀』の景行天皇の異質性は「長く都を離れて外征の指揮を執った」という点に集約されるのであり、その行動自体は配下に指令を出す「為政者」としての行動を逸脱してはいないのであると言える。

そのような立場に立つのであれば、『日本書紀』に於いてのみ景行天皇の征西記事が記述される事は、必ずしも『古事記』の景行天皇像との差別化を図る意図によるものとは言えない。

配下に指令を出し異民族の征討を行う司令者としての性質に関しては、『日本書紀』に於いてのみ描かれた征西を行う姿も含め、『古事記』に於けるヤマトタケルへ指令を出す姿と同様なのであり、この点は両書間で一貫していると考え得るのである。

『古事記』『日本書紀』に於ける天皇・皇太子の武力行使に関する考察（太刀川）

『日本書紀』の景行天皇の征西記事に於いて主に示されるのは西国平定に関する記述の増加によるヤマト王権の西国支配の正当性なのであり、これらの記事は『古事記』に於ける景行天皇像と『日本書紀』に於ける景行天皇像を差別化する事を主目的として記されたものではないと言う事が出来ようと思う。

二、仲哀天皇記事について

次に、『古事記』『日本書紀』両書の仲哀天皇記事に於ける記述に関して考察を加えていきたい。

記述を整理すると、『古事記』『日本書紀』に於いて異民族及び政敵の征討を行った天皇として挙げられるのは、神武、崇神、垂仁、景行、仲哀、応神、仁徳、雄略、継体、宣化、欽明、崇峻、推古、舒明、斉明、天智となっている。この中で、自ら兵を率いて異民族或いは政敵の征伐、誅殺に向かったとの記述がある天皇は、神武、景行、雄略、天智、そして一書の仲哀のみとなっている（表二参照）。

『古事記』に於いて、天皇及び後に天皇となる人物が自ら兵を率いて征伐を行う事が記述されるのは即位前の神武天皇と、同じく即位前の雄略天皇のみであり、やはり例外的であると言える。また、雄略天皇の出撃は天皇を暗殺した目弱王の誅殺の為であり、異民族に対する出撃を行ったのは即位前の神武天皇のみである。

また、『日本書紀』に於いても出撃例は五例と数少なく、雄略天皇と天智天皇の出撃に関してはヤマト王権内の人物に対するものとなつ

ている。

そして注目すべきは、このうち、立太子及び即位後に自ら出撃し前線の指揮を執つたと考えられる内容となっているのが、『日本書紀』一書に於ける仲哀天皇の記述のみであるという点である。

以下にその記述を抜粋する。天皇が熊襲征伐を企図した際、「熊襲より新羅を平定するべきである」との神託を信じずに反駁した場面の直後である。

表二 天皇自ら行った軍事行動と結果

	事績	実行者	結果
古事記①	登美毘古征伐	神倭伊波禮毘古命 (神武天皇)	敗走、 五瀬命が戦死
古事記②	目弱王誅殺	大長谷若建命 (雄略天皇)	目弱王は配下に自らの殺害を命令
日本書紀①	長髓彦征伐	神日本磐余彦 (神武天皇)	敗走、 五瀬命が戦死
日本書紀②	丹敷戸畔征伐	神日本磐余彦 (神武天皇)	成功するも神の毒にあてられ気絶
日本書紀③	熊襲征伐	仲哀天皇	失敗、 天皇薨去
日本書紀④	八鈞白彦皇子、 坂合黒彦皇子、 眉輪王誅殺	大泊瀬皇子 (雄略天皇)	成功
日本書紀⑤	乙巳の変、 蘇我入鹿誅殺	中大兄皇子 (天智天皇)	成功

天皇猶不信、以強擊熊襲、不得勝而還之。

九年春二月癸卯朔丁未、天皇、忽有痛身而明日崩、時年五十二。即知、不用神言而早崩。一云、天皇親伐熊襲、中賊矢而崩也。

仲哀天皇が崩御した理由として、主文に於いては「有痛身」と詳細な理由がほかされているが、「二云」として仲哀天皇が自ら熊襲を討伐しに出撃し、その矢に当たって死亡したとの説が併記されているのである。主文の内容も考えあわせれば、この一書の記述内容に於いて仲哀天皇は神意に反して熊襲を討とうとした為に敗死する事となったと解釈できる。

一方、『古事記』に於ける記述では、仲哀天皇は信託を信じなかつたために「凡茲天下者、汝非應知國」と統治者としての不適格性を糾弾されており、その直後に突如として崩御している。先行論に於いても指摘される通り、神意をはじめとする言葉の意味を正確に理解する事は、『古事記』『日本書紀』両書に於いて共通して統治者としての条件の一つであると考えられており、この仲哀天皇の崩御は神意の取り違えにより天皇として不適格であるとされた為であろうと解釈される。仲哀天皇の父であるヤマトタケルもまた、両書に共通して山の神の正体を取り違えた事をきっかけとして死に向かうのであり、皇族による神との交渉の失敗は当時重大な瑕疵として扱われていた。故に、この仲哀天皇の崩御は日本書紀に於いても神託を信じずに出兵した為であると考えられてきた。それは確かに妥当な論であり、文脈に於い

て理由の一つとして表現されている。

然し、今回考察を加えたいのは、この場面に於ける仲哀天皇の行動が神意の取り違えであつただけでなく、天皇が即位後に直接出撃した唯一の例であるという点である。

『日本書紀』に於ける一書とは、単なる異伝に留まらないものであり、『日本書紀』主文のみならず『古事記』にも共通して存在する世界観、及び文脈を構成する重要な要素の一つであることが複数の先行論に於いて示されてきた。

松本直樹氏は、『日本書紀』主文中に於いて造化神タカミムスヒが何の前置きも無しに唐突に登場しており、『古事記』及び一書の内容を踏まえていなければその皇祖神としての立ち位置の妥当性が示されない事や、一書の記述に於いては示されているものの主文に於いては触れられていない筈の内容を前提に主文の内容が記されている事などに触れ、以下のように述べている。⁽⁶⁾

一書は、主文の内容にもちろん抵触する。主文と違うからこそ一書なのである。だからといって、我々読者はそれを無視してよいのだろうか。答えは否である。日本書紀の〈神話〉の全体を見通した時、ある段において主文の主張に反する一書を、たかが一書として片付けることはできないのである。その一書があつたからこそ、後の主文に現れる新しい理念が説得力を持つこともあるのだ。こうして、主文は、一書群を背景としながら、王権国家の

成立に向けて、国作りの複数の理念の間を渡り歩いてゆくのである。

この論は『日本書紀』神代巻に関するものであるが、一つの書物である『日本書紀』の内部に於いて一書の扱いが全く異なるなどと言う事は考え難い。寧ろ、神代巻に集中して見られるこの一書と言う存在が、この記述に於いて再度現れてくることの意味を考える必要がある。

仲哀天皇が正文に於いて『古事記』と同様に、神意を信じなかったが故に崩御しているような印象で語られている事は先述した通りである。一方で、「一云」として異民族に討たれ薨去した旨が記述されている事には何らかの意図があるはずである。

さて、ここで気になってくるのが、本稿に於いて先述した景行天皇の事跡を含む他の天皇に関する記述である。景行天皇は熊襲征伐の為に軍を率い出征したものの、前線には一度も出撃していなかったことは先程示した通りである。

では、他の天皇に関してはどうか。今一度表二を参照するに、仲哀天皇の記述はやはり異質である事が分かるように思う。『古事記』『日本書紀』両書の記述に於いて、既に即位し治世のただ中にある「天皇」が都を離れ、自ら前線に出撃していると思われる表現が為されているのは仲哀天皇のみなのであり、他の天皇が自ら出撃するのは何れも即位前、皇子時代なのである。

更に言うならば、皇子時代の出撃であってもその全てが立太子されていない時点での事跡となっているのであり、また成功しているのは同じ皇族同士、或いはヤマト王権内の臣下を誅殺する場合に限られている。

仲哀天皇の熊襲征伐失敗に関しては先述した通りであるが、表二中の古事記①、日本書紀①に示した通り、後に神武天皇となるカムヤマトイハレビコが自ら兵を率い、異民族との戦闘で前線に於いて指揮を執った戦闘では皇軍は敗走しているのであり、兄であるイツセノミコトは命を落とす結果となっている。そして、その後征伐を成功させた際には、『古事記』に於いても『日本書紀』に於いてもカムヤマトイハレビコは自ら出撃せず、配下を派遣している描写となっているのである。詳しくは次項③にて記述する事とする。

このことに鑑みるに、為政者、司令者的立ち位置である筈の天皇が武將、現場指揮官的な役割を果たす事は望ましい事ではなかったのであり、ある種タブーとして扱われていたと考える事ができるのではなからうか。

三、天皇及び太子が「出撃」する事に関する記述の整理

もう一つ確認したいのが、天皇が自ら出撃し、敵を討伐する事がタブー視されていたと考える根拠についてである。以下に幾つかの例を挙げ、論証する事を試みたい。

①『古事記』に於けるアナホノミコの出撃

先ず挙げられるのは、『古事記』に於いて、のちに安康天皇となるアナホノミコが兵を率いて、当時太子であったカルノミコを包囲する場面に関する記述であろう。カルノミコは太子であったが、同母妹と姦通した為に百官はカルノミコを見限り、アナホノミコにつく事となる。大前小前宿禰の家に逃げ込んだカルノミコをアナホノミコが包囲する場面である。

以下に、『古事記』に於ける該当記述を抜粋する。

是以、百官及天下人等、背輕太子而、歸穴穗御子。爾輕太子畏而、逃入大前小前宿禰大臣之家而、備作兵器。爾時所作矢者、銅其箭之内。故號其矢謂輕箭也。穴穗御子亦作兵器。此王子所作之矢者、即今時之矢者也。是謂穴穗箭也。於是、穴穗御子、興軍圍大前小前宿禰之家。

(中略)

爾其大前小前宿禰、舉手打膝、舞訶那傳自謂下三字以音、歌參來。

(中略)

如此歌參歸白之、我天皇之御子、於伊呂兄王、無及兵。若及兵者、必人咲。僕捕以貢進。爾解兵退坐。故大前小前宿禰、捕其輕太子、率參出以貢進。

允恭天皇記事に記述されるこの場面に於いては、兵を挙げたアナホ

ノミコは「我天皇之御子、於伊呂兄王、無及兵。若及兵者、必人咲」と大前小前宿禰に諭されているのであり、実際それによってアナホノミコは兵を引き上げている。またカルノミコは自ら迎撃を行おうと武装の準備をするものの、大前小前宿禰に捕縛されて引き渡され、その後流刑に処されて生き延びる結果となっている。

即ち、のちに天皇となる事が確定的となった皇子が自ら兵を率いて出撃し、現太子であるカルノミコを包囲することは当時としても望ましくない事として兵を退くことを納得できる事項だったのである。

また、アナホノミコは結局この出撃でカルノミコを殺害するには至っていない。また、この出撃に関しては「興軍圍大前小前宿禰之家」としか書かれておらず、カルノミコを誅殺する意図があったかは明記されていないのである。更に言えば、カルノミコはこの場面に於いて、自ら迎撃のための武器を準備していた。兵を退いたアナホノミコは目的を達成し、自ら迎撃しようとしたカルノミコは流刑に処されて太子に任命された人物でありながら皇位には就かないまま終わるといふ考え方もできると言えよう。

一方、『日本書紀』に於いては、この場面でアナホノミコはそもそも出撃しておらず、カルノミコは天皇によって問い詰められて自白するという流れになっている。

ここからも、『古事記』『日本書紀』の文脈に於いて後に天皇となる事が確定的となった後の皇子が自ら出撃する事は、天皇の出撃と同じく避けるべき事柄として認識されていたとする論拠とできるように思う。

②『日本書紀』に於ける雄略天皇の出兵中止

次に、『日本書紀』に於ける雄略天皇の記述に関して着目したい。雄略天皇が、貢職の滞っていた新羅を自ら征伐しに向かおうとする場面である。

以下に、該当箇所を抜粹する。

三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、無往也。天皇由是、不果行、乃勅紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連談、此云箇陀利、小鹿火宿禰等曰、新羅、自居西土、累葉稱臣、朝聘無違、貢職允濟。逮乎朕之王天下、投身對馬之外、竄跡匪羅之表、阻高麗之貢、吞百濟之城。況復朝聘既闕、貢職莫脩。狼子野心、飽飛、飢附。以汝四卿、拜爲大將、宜以王師薄伐、天罰曩行。

（中略）

紀小弓宿禰等、卽入新羅、行屠傍郡。行屠、並行並擊。新羅王、夜聞官軍四面鼓聲、知盡得喙地、與數百騎亂走。是以、大敗。

この内容は、仲哀天皇の場面と対照的であると言える。自ら兵を率いて出兵しようとした雄略天皇に対し、「神」が「無往也」と引き留めているのであり、雄略天皇はその言葉に従って配下である紀小弓宿禰らを派遣する事となっている。

神意を信用せずに自ら出撃した結果敗死する仲哀天皇に対して、この記述に於ける雄略天皇は神意に従って自ら出撃する事を取りやめ、

配下を派遣したことによって、新羅征伐に於いて勝利を収めているのである。

このことは、神意に従う事の重要性を示しているだけでなく、征伐に於いて天皇が自ら出撃するのではなく「配下を派遣する」立場にあることの重要性をも示していると考ええる事の出来る描写である。

③カムヤマトイハレビコのウケヒ

神武東征記事に於いて、カムヤマトイハレビコが直接出撃した戦闘では敗走してしまっている事については先述したが、『日本書紀』の神武東征の記事に於いてもう一つ注目すべき記述がある。

以下に、該当箇所を抜粹する。東征の途中で、カムヤマトイハレビコが全国の平定を祈って行ったウケヒである。

天皇又因祈之曰、吾今當以八十平瓮、無水造飴。飴成、則吾必不假鋒刃之威、坐平天下。乃造飴、飴卽自成。

この場面に於いてカムヤマトイハレビコは、「武力を用いずして天下が平定できるように」とのウケヒを成功させている。

この記述を重く見るならば、この後の進軍に於いて神武天皇は自ら兵を率いて出撃はしていない、則ち自らの手では武力を行使していないと考え得るのである。

であるならば、その後の進軍に於ける他勢力の征討は、景行天皇の

征西記事に於ける土蜘蛛津頼の征伐場面と同じく、天皇「一行」による征伐であった描写が省略されたものであり、天皇が自ら武力を行使した事を積極的に描いた記述ではないと考えられる。

神武天皇が自ら出撃した例として、ナガスネヒコとの戦いの場面が挙げられるが、この戦では皇軍は敗走する事となったのであり、先述の通りイツセノミコトを失う結果となっている。自ら出撃した一書の仲哀天皇が命を落とす事となった理由も、その点にあったのではなからうか。

そう考えると、先述した種々の事項と併せ、天皇・皇太子だけでなく、王権側の司令者としての性質を有する人物については、即位前であっても軍事行動に際して自ら前線に出撃してはならなかったのであるとも解釈できる。

実際、『日本書紀』に於ける神武東征の一連の記事の中に、明確に天皇が自ら手を下して何者かを殺害していると思われる描写は見当たらないのである(表三参照)。エウカシを殺害する場面ではミチノオミを派遣しており、他の場面でもやはり配下を派遣している。しか

表三 神武東征記事の軍事行動

古事記			日本書紀		
事績	実行者	結果	事績	実行者	結果
登美能那賀須泥毘古征伐	神倭伊波禮毘古命、五瀬命	敗走、五瀬命が戦死	長髓彦征伐①	神日本磐余彦、五瀬命	敗走、五瀬命が戦死
名草戸畔征伐	神倭伊波禮毘古命	成功するも、その後神の毒にあてられ気絶	丹敷戸畔征伐	神日本磐余彦	成功するも、その後神の毒にあてられ気絶
兄宇迦斯征伐	道臣命、大久米命	成功	兄猾征伐	道臣命	成功
土雲八十建征伐	八十膳夫	成功	八十梟帥征伐、誓約	椎根津彦、弟猾	成功
荒夫疏神征伐	神倭伊波禮毘古命一行	成功	八十梟帥残党征伐	道臣命、大來目部	成功
			兄磯城征伐	椎根津彦	成功
			長髓彦征伐②	道臣命、大來目部	成功
			三處土蜘蛛征伐	皇軍	成功

もナガスネヒコとの再戦に於いては神の助けでナガスネヒコの軍勢は「退却」するのであり、その後ナガスネヒコを殺すのは天皇本人ではなく、物部氏の祖であるニギハヤヒとなっている。

更に、東征の終わりに際してカムヤマトイハレビコは「自我東征、於茲六年矣。頼以皇天之威、凶徒就戮。」と発言しており、平定は自分の武力ではなく天の靈威によるものであるとしている。この部分はウケヒの内容に対応した部分となっているが、やはりカムヤマトイハレビコ自身が武力を行使した為に平定が為されたとは言われないのである。

『古事記』に於いても、神武東征では自ら出撃した戦では敗走し、また神々の征伐の際は「受取其横刀之時、其熊野山之荒神、自皆爲切仆」とある通り、天皇が横刀を振るうと神々は「自然に打ち倒される」のであって、やはり戦闘は行われていないと言うこともできる。また、トミビコとの再戦は直接的には描かれておらず、やはり天皇自らが明確に兵を前線で指揮して敵を打ち破り、殺すと言う描写は為されていないのである。

④ 壬申の乱に於ける描写と勝敗

『日本書紀』に於ける壬申の乱の描写に於いても、これまでに見てきた法則の発露ともとれる描写が存在する。オホアマとオホトモの軍勢が決戦に向かう場面での、オホトモ側の陣営について記した描写である。

以下に、該当箇所を抜粋する。

時、大友皇子及群臣等、共營於橋西而大成陣、不見其後。旗幟敵野、埃塵連天。

(中略)

則大友皇子・左右大臣等、僅身免以逃之。

ここに於いて、オホトモは群臣と共に陣を敷いているのであり、軍勢が敗走する際の描写に於いても「僅身免」と書かれているように、前線に近い位置に居たと思われる。一方で、オホアマは拳兵こそ自ら呼びかけるものの、協力者となる豪族・配下らの合流後は前線には立っていないのであり、またその前には軍事行動を行っていない。壬申の乱の記述に於いて、後に天皇となるオホアマが前線指揮を行わず、敗死するオホトモは前線に近いところに自ら出向いていると言う対称性は、これまでの法則に従っていると見えよう。

前に挙げたアナホノミコとカルノミコの事例では、カルノミコに従う臣下が前小前宿禰らしか居なかったために自ら迎撃の準備をせざるを得なかったと言う事情があるとも言えるが、オホトモに関しては「大成陣、不見其後。旗幟敵野、埃塵連天」とある通り多くの配下を有しているのであり、また陣営内には有力な將軍も存在している。にもかかわらずオホトモは前線付近に姿を現すのである。

このように、『古事記』『日本書紀』の両書に於いて天皇は概ね中央或いは前線拠点に於いて配下に指令を出す事で軍事行動を行う司令者としての立ち位置を崩していないのであり、やはり前線で指揮を行う武將、指揮官としての働きは殆ど行われていない事が分かる。武將・英雄的な性質が先行論に於いて指摘される神武天皇や景行天皇についても、これまでに示した通りこの法則は崩れていないのである。

そして、例外であるところの仲哀天皇は熊襲征伐を完遂する事なく敗死するのである。やはり天皇或いは後に天皇となる皇子が配下の武將を派遣する事なく直接前線で兵の指揮を執ることは、避けるべき事項であると考えられていたのではなからうか。

おわりに…論の整理と今後の展望

本稿に於いては、天皇及び太子の軍事行動に関して整理を行った。

『古事記』『日本書紀』の文脈に共通して、天皇及び皇太子、また天皇となる事が確定した皇子が直接兵を率いて政敵の征伐を実行する例は少ないのであり、しかも実行した場合はいずれの場合でも失敗に終わっているのである。

やはり天皇及びそれに準ずる存在は指揮官として責任者を派遣して軍事行動を行うべき存在なのであり、自ら前線に立って指揮を行う事はタブーと見られていたのではないかと考えられる。

であれば、今回主に触れた軍事行動の面に関しては、『古事記』と『日本書紀』に於ける天皇の描写には、従来の論で言われるような大

幅な差異、例えば、『古事記』とは異なり『日本書紀』の景行天皇像は古い大王の姿を残している等の「ずれ」は無かったと言うことが出来るのではなからうかと思う。『古事記』に於いても『日本書紀』に於いても、共に天皇や皇太子は自ら武力行使をしてはならない存在として描かれ、政武は分けられるべきものとして一貫した描写が為されていたのであり、少なくとも軍事面に関しては、その性質の描写に明らかな齟齬や致命的な差異は無いと言えるのが、本稿の企図する所である。

このように考えるのであれば、例えば『日本書紀』に於けるヤマトタケルが何故皇位に就くこと無く死んでいくのかについても、神意の取り違い以外にも理由があったとする事ができるのではなからうか。今後も更に細部に関する論証を含め、論の妥当性を示していきたい。

また、未だ論証を開始した段階ではあるものの、本稿に示した「指導者は自ら出撃してはならない」という法則は、神代巻に於いても崩れない物なのではないかと考えられる^(?)。一方で、兵を率いずに単独或いは同等の皇子と共に誅殺を実行する場合や、皇位につく事が確定していない場面に於ける出撃に関してはさらなる論考を加える必要があるのは事実である。この見通し通りであるのかを含め、さらなる考証を続けていく必要があると思う。

『古事記』『日本書紀』の描く天皇は、一貫して司令者として振る舞うのであり、最早自らの手で武力を振るう「英雄」としての像を結ばないのである。

『古事記』『日本書紀』に於ける天皇・皇太子の武力行使に関する考察（太刀川）

注(1) 本稿では、熊襲、土蜘蛛、蝦夷等に加え、異国の人々を含め、当時のヤマト王権が自分たちとは「異」なる存在と位置付けていた者たちに対する総称としてこの語を用いる。

(2) 『上代説話事典』（大久間喜一郎・乾克己編、雄山閣、一九九三）による。松前氏の、西欧古典における英雄の範型論を基本とした日本の英雄範型論をベースとして、英雄説話の構成要素を論考している。

(3) 松本直樹氏は、この呼称に関して、主文と一書群が文脈の主流と副流に当たる働きを持つとしてこの呼称を用いている。（『神話で読みとく古代日本』、ちくま新書、二〇一六）筆者の論もこの意見に根差す物である為、この呼称を使用した。

(4) 「景行天皇記に於ける倭建命」（『明治大学教養論集』、一九九三）による。

(5) 本稿に於いては、「出征」とは司令者として兵を率いて征討地に向かう事を指し、「出撃」とは自ら現場指揮官として前線で指揮を執る事であるとする。

(6) 『神話で読みとく古代日本』、ちくま新書、二〇一六）による。

(7) 葦原中国の平定に際して、司令神の立場にある神は総て他神の派遣によって平定を行っており、自ら出撃する説話は現時点で発見できていない。

（『古事記』引用部分の底本は、岩波文庫の『古事記』、倉野憲司校注、二〇〇七に依った。また、『日本書紀』引用部分の底本は、同じく岩波文庫の『日本書紀』各巻、坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注、一九九四に依った。なお、旧字などを一部改めている。）